

教会 — 全2回の第2回

「また、キリストは、からだ、すなわち教会の頭であり、すべてのものの先頭であり、死者の中から最初に生まれた方であり、すべてのものにおいて、キリストが第一となるためです。」

コロサイ人への手紙 1:18

先月号の『ドーンマガジン』誌に掲載された「教会」というテーマに関する考察の第1部では、「教会」という言葉の聖書的な意味、イエスの初臨後に教会がどのように成立したか、そして会員となるための要件について取り上げました。また、「キリストにバプテスマを受ける」とはどういうことか、水によるバプテスマの象徴、そして聖書に示されている教会の組織についても論じました。

今月号では、このテーマについてさらに考察を深めていきます。続くページで取り上げる重要なトピックには、十二使徒や教会の他の奉仕者たちの役割、教会の使命、そしてキリストを通して全人類を罪と死から救うという神の計画における天上の段階と地上の段階などが含まれます。

十二使徒

神の定めによれば、ペンテコステを起点として、教会全体は神によって任命された十二使徒によって仕えられることになっていました。（ヨハネの黙示録 21:10,14；エペソ人への手紙 2:19,20）これに従い、イエスは宣教活動中に自分と共に歩む十

二人の者を選び、彼らが イエスから直接の訓練と教えを受けられるようにしました。彼らは、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ、フィリポ、バルトロマイ、トマス、マタイ、アルパオの息子ヤコブ、タダイ、シモン、そしてユダでした。マタイによる福音書 10:2-4

ご存知のように、ユダは不忠実であることが判明し、聖書によれば、パウロが主によって彼の後任として選ばれたことが示されている。使徒言行録 1:23-26には、残りの11人の使徒たちが、ユダの代わりとなる一人を選ぶための取り組みについて記されています。彼らはマティアスを選出しました。しかし、この決定は彼らが聖霊を受ける前に行われたものであり、主がその選択を認められたという証拠はありません。その後、マティアスの名は登場しません。

「使徒」（ギリシャ語：「アポストロス」）という言葉は、「遣わされた者」、すなわち福音の代表者や使節を意味します。この広い観点から見れば、すべてのクリスチャンは使徒です。なぜなら、私たちは皆「キリストの使節」だからです。（コリントの信徒への手紙二 5:20）実際、ギリシャ語の「アポストロス」という語は、聖書において、選ばれた十二使徒以外の個人を指して用いられています。（ヨハネによる福音書 13:16；フィリピの信徒への手紙 2:25）しかし、これは彼らが、主によって特別に選ばれた者たちに神の任命によって与えられたのと同じような、教会における高い権威の地位を占めていたことを意味するものではありません。

ヨハネによる福音書17:12で、イエスは神によって任命された十二人の使徒たちを、天の父がご自身に与えてくださった者たちとして言及しています。これらの特別な使徒たちは、互いにその地位を選んだわけではないため、ユダの代わりとしてマティアスを選ぶ権限はありませんでした。主が他の使徒たちを選ばれたのと同様に、復活後の主はご自身の時と方法に従ってパウロを選び、十二人の一人としての権威を彼に与えられたのです。

十二使徒は、単なる福音の宣教者以上の存在でした。彼らは聖霊によって奇跡的に導かれ、神の聖なる御言葉のメッセージを権威と正確さをもって語り、書き記すことができたのです。彼らの言葉は、かつてそうであったように、今もなお、すべてのクリスチャンに対する神からのメッセージです。彼らが教会の組織において占めるこの権威ある立場ゆえに、完成された教会は都に例えられているのです。この象徴的な都には十二の礎石があり、それらの石には「小羊の十二使徒」の名前が刻まれていると示されています。ヨハネの黙示録21:14

その他の奉仕者たち

エペソ人への手紙4章11節で、使徒パウロは、主が教会に他の奉仕者たちを備えてくださったことを教えています。使徒たちに加え、主は預言者、伝道者、牧者、教師を備えられました。ペテロは、旧約聖書の著者たちを神の「聖なる預言者たち」と呼んでいます。（ペテロの手紙第二 3:2）彼らは「聖霊に導かれて」書いたもので、クリスチャンは、使徒たちの言葉と同様に、彼らの言葉も権威あ

るものとして受け入れるべきです。ペテロの手紙
第二 1:21

しかし、パウロが預言者を教会の奉仕者として語る際、彼はこの用語をはるかに広い意味で用いており、福音を公に説く者たちを指しています。（コリントの信徒への手紙一 12:28；エフェソの信徒への手紙 4:11；使徒言行録 11:27,28；使徒言行録 15:32；使徒言行録 21:10,11）これらの預言者、伝道者、牧者、教師は皆、教会において不可欠な奉仕者ですが、十二使徒のように靈感を受けたわけではなく、また使徒たちと同じような奇跡的な方法で任命されたわけでもありません。

新約聖書における「各教会で長老たちを任命した」という表現は、ギリシャ語の原文「**ἐπίσκοπος**」によれば、投票のように「手を挙げる」ことをより適切に指しています。（使徒言行録 14:23）ここから明らかに示唆されるのは、長老や執事といった教会の下位の奉仕者たちは、彼らが仕えるべき会衆の投票によって選出されるべきであったということです。

上記の聖句にも見られる「長老」という聖書用語は、一般的に、霊的な面から教会に仕える男性を指します。牧師、教師、伝道者、あるいは公の場で聖書を解説する預言者などは、いずれも「長老」という総称に含まれます。使徒言行録14章23節で翻訳されているギリシャ語の「**presbuteros**」は、「成熟した者」を意味します。教会においては、信仰が堅固であり、霊的な経験において成熟していると認められている者を指します。

「監督 (bishop)」という言葉も新約聖書で使用されており、教会によって選出された男性の奉仕者に適用されます。この言葉の原語であるギリシャ語「エписコポス (episkopos)」は、「監督者」または「見張り人」を意味します。すべての長老は、機会と能力に応じて、本来、教会における監督者である。神の群れを見守り、特に霊的な面においてその必要に配慮することは、彼らの義務である。テモテへの手紙第一 3:1,2 ; テトスへの手紙 1:7

「執事 (deacon)」という言葉も、初代教会の組織に関連して数回登場します。これはギリシャ語の「ディアコノス (diakonos)」の訳語であり、「用事をこなす」あるいは「世話をする」という意味です。聖書によれば、執事は「評判が良く、聖霊と知恵に満ちた者」であり、教会の物質的な運営を助けるために任命されたとされています。最初に任命された執事は、エルサレムの教会にいました。使徒言行録6:2-4 ; テモテへの手紙第一 3:8-13

会衆によって長老（監督）や執事として適切に選出される者の聖書的な資格は、パウロによってテモテへの手紙第一3章1～13節に示されています。これらの資格において、「教えるのにふさわしい」という表現は、聖書に教えられている神の計画の真理を正しく理解していることを意味します。これらの資格を満たす兄弟たちがいる奉献された信徒の集まりは、その規模の大小にかかわらず、聖書によって、彼らをこれらの奉仕に選出する権

限を与えられています。そうして行われた任命は、主によって認められます。

聖書は、どのクリスチャンの集まりも、奉仕者を選出したり、集会を開いたり、主の働きを遂行したりするための権限を、親教会に求める必要はないことを明らかにしています。同様に、会衆がこうした自由を行使するために、大規模である必要もありません。聖書の記録によれば、使徒時代の多くの教会、すなわちクリスチャンの集まりは、信者たちの家庭で組織され、その家庭で定期的な集会を開いていました。（ローマ人への手紙16:5；コリントの信徒への手紙第一 16:19；コロサイの信徒への手紙 4:15）今日でも同じことが行われています。昔も今も、主は、グループとして——あるいは聖書的な意味での「教会」として——協力し合える仲間を見つけた人々を豊かに祝福してください。彼らは、単に手を挙げるという簡単な方法で、自分たちの奉仕者を選出することができます。会員名簿は必要なく、聖書によってそのようなものが認められているわけでもありません。

初期教会における様々なグループが開催した集会の性質について、聖書にはあまり具体的な記述がありません。確かに、使徒たちや他の人々は、時折説教を行いました。しかし、説教を行う資格のある人がいなくても、有益な集会は開催できます。聖書の研究のための集会（主題別であれ文脈別であれ）、そこで出席者全員が自分の考えを述べたり質問したりする機会があるような集会は、非常に有益です。長老が選出されている場合は、その長老が学び会が秩序正しく行われるよう奉仕す

べきです。祈り、賛美、そして証しの集いも、神の御心を知り、それを行うことに真剣に取り組んでいる人々にとって、霊的に有益なものです。

教会の使命

教会の現在の使命は三つあります。第一に、将来の奉仕の働きに向けて聖徒たちを完全に備えさせることです。（エペソ4:12,13）第二に、各会員の中に、キリスト者としての品性の実と恵みを育むことです。（ガラテヤ5:22,23；ペテロ第二1:5-8）第三に、今や目前に迫っているキリストの祝福の王国について、世に対して神の証人となることです。マタイによる福音書24:14

この主題に関する考察の第1部で、私たちはイエスがペテロに語られた次の言葉に注目しました。「この岩の上に、わたしの教会を建てよう。」（マタイによる福音書16:18）時が来れば、「建てられる」ものは完成に至ります。教会の「建設」が永遠に続くことは、神の御心ではありません。したがって、キリストを通して救いを得るすべての者が教会の構成員になるというわけではありません。「教会」という言葉[ギリシャ語：「エクレシア」]の本来の意味は「呼び出された者たち」であり、これは現在の神の御旨という概念とは相反するものです。教会は、この世から「呼び出されている」のです。（コリントの信徒への手紙一 1:26；ペトロの手紙一 2:9）その数は「わずか」であり、「小さな群れ」となるでしょう。（マタイによる福音書7:13,14；マタイ22:14；ルカによる福音書12:32）約束された神の王国が来るまでは、世界全

体を改宗させることは神の計画ではありません。

マタイ6:10

「あなたはキリスト、生ける神の御子です」とペテロは証ししました。（マタイによる福音書**16:16**）この言葉は、イエスを旧約聖書のメシアに関する約束と同一視するものであり、ペテロが、それらの約束を成就するために神が遣わされた方として、イエスを正しく認識していたことを示しています。教会を通しての神の御計画全体を明確に理解するためには、キリストに関する旧約聖書の約束を心に留めておくことが不可欠である。なぜなら、教会は、それらの約束の成就においてキリストと結びつくために、この世から召し出されたからである。神はアブラハムに、「あなたの子孫によって、地上のすべての国民は祝福を受ける」と言われた。（創世記**22:18**）ガラテヤ人への手紙**3章16節**で、パウロはこの約束の「子孫」がキリストであることを教えています。使徒は、この約束の子孫についてさらに詳しい情報を与えています。ガラテヤ人への手紙**3章27節**と**29節**には、次のように記されています。「キリストにあってバプテスマを受けたあなたがたは、みなキリストを身に着けたのです。……もしあなたがたがキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人である。」ここには、神の御心を行うために完全に献身し、キリストの体である教会の成員となり、死に至るまで忠実である者たちが、すべての人が祝福されることになる約束の「子孫」の一部となるという、紛れもない証拠がある。ヨハネの黙示録**2:10**

教会の設立は、人類に対する神の御計画の完成ではありません。それは、人類を祝福するという神の計画の始まりにすぎないのです。ヤコブの手紙1章18節では、教会は神の被造物の「ある種の初穂」であると述べられています。この表現はヨハネの黙示録14章4節でも用いられており、神の御国の天的な側面である象徴的なシオンの山において、「小羊」であるキリスト・イエスと共に天に結ばれている者たちに当てはめられています。ヨハネの黙示録14章1節；ヘブライ人への手紙12章22、23節

コリントの信徒への手紙第一第15章で、パウロは、教会と世の双方にとってのいのちの希望が、死者の復活にかかっていることを極めて明確に指摘しました。もし死者の復活がないならば、と彼は論じました、「キリストにあって眠りについた者たちも滅びてしまったことになる」。(コリントの信徒への手紙第一 15:18) しかし、彼は復活の確証と、すべての人が永遠の命を得る機会を私たちに与え、「アダムにおいてすべての人が死ぬように、キリストにおいてすべての人が生かされる」と語った。コリントの信徒への手紙第一 15:22

そしてパウロは、復活には明確な順序、すなわち段階があることを示しています。「人はそれぞれ自分の順序に従って復活する。キリストが初穂であり、次に、キリストの来臨の際、キリストに属する者たちが復活する。」(コリントの信徒への手紙一 15:23) ここで言及されている「初穂」とは、教会を指します。これに続いて、ギリシャ語の原文をより適切に訳すと、「その後、キリストの

臨在の間にキリストのものとなる者たち〔教会に属さないすべての人々が、それぞれの順序に従って〕」となります。この節の「来臨」という言葉は、ギリシャ語の「パルーシア (Parousia)」から訳されたもので、「臨在」を意味します。これは、キリストとその教会が、罪と死を滅ぼし、全人類に、キリストの流された血によってもたらされたいのちの賜物を受け入れる機会を与えるために統治する、キリストの千年の王国を指しています。

その直後に続くパウロの記述は明確です。「それから終わりが来ます。キリストが王国を父なる神に引き渡し、あらゆる支配、権威、力を打ち砕かれた時です。キリストは、すべての敵を御足の下に置かれるまで、統治し続けなければならないからです。最後に滅ぼされる敵は、死です。」（コリントの信徒への手紙一 15:24-26）これこそが、キリストと教会を通して成し遂げられる、神の偉大かつ究極の目的である――すなわち、教会の建設が完了した時に、全人類に及ぶ「その後」のな祝福である。

天と地

パウロは復活に関する教えの中で、ある者は天の体を受け、ある者は人間の体、すなわち地上の体を受けると明らかにしています。それぞれのケースにおける決定的な要因は、蒔かれる「種」あるいは「むき出しの穀粒」の種類です。（コリントの信徒への手紙一 15:37,38）パウロが言及する「それ」あるいは「むき出しの穀粒」とは、単にそ

の人のアイデンティティ、つまり生涯にわたる思考や人格の総体です。

神の御心を行うために完全に奉獻され、犠牲的な死によってキリストと共に葬られた人々は、復活の際に「天の」体、すなわち天の体を与えられる。(1コリント15:40) これは、彼らが現在の地上の生涯の残りの年月を通じて、「新しいいのち」のうちに歩むかどうかにかかっている。(ローマ人への手紙 6:4) この地上の巡礼の旅の間に、彼らは「上のことに心を向ける」ことを学びます。彼らの希望は天にあり、信仰によって、彼らは象徴的にキリストと共に「天の所」に住んでいるのです。(コロサイ人への手紙 3:2 ; エペソ人への手紙 1:3) このように、彼らはまだ肉体にありながら、霊的な品性を「蒔く」のです。復活の際、これらは天の報いを受けます。

しかし、大多数の人々は霊的な事柄に関心を持ちません。これは、彼らが必ずしも邪悪であるという意味ではありません。彼らのほとんどはそうではありません。彼らは人間として、地上の存在として創造されたため、この世の良きものを愛しており、神は彼らが天上の事柄を志さないからといって、彼らを非難されることはありません。死において、彼らが地上の品性を「蒔く」のは物事の本質そのものであり、その結果、人間として、「地上の体」をもって死者の中からよみがえることになるのです。1コリント15:40

のちに『ヨハネの黙示録』20章6節で「最初の復活」と記述される教会の復活について、パウロは次のように説明しています。「朽ちるものとして蒔

かれ、朽ちないものとしてよみがえる。辱めとして蒔かれ、栄光としてよみがえる。弱さとして蒔かれ、力としてよみがえる。自然の体として蒔かれ、霊の体としてよみがえる。」コリントの信徒への手紙一 15:42-44

これに対し、パウロは次のように付け加えています。「自然の体があり、また霊の体がある。」（コリントの信徒への手紙一 15:44）言い換えれば、パウロは、「最初の復活」に参加する者たちが経験する本質の変化を説明するにあたり、死からよみがえるのは彼らだけであるという意味ではないことを理解してほしいと願っているのです。なぜなら、全人類は死から救い出されることになっていますが、彼らは自然の、地上の、人間の体を受け取るだけだからです。

パウロは教えを続け、次のように述べています。「最初の人 は 地 から 出 た 者、土 の 者 だ す。第 二 の 人 は 天 から の 主 だ す。土 の 者 [人 間 の 希 望 や 欲 望 を 抱 い て 死 ぬ 者] が ど の よ う な も の で あ る か、土 の 者 [復 活 に お い て] も ま た そ の 通 り で あ り、天 の 者 [今、天 の 事 柄 に 心 を 向 け て い る 者] が ど の よ う な も の で あ る か、天 の 者 [復 活 に お い て] も ま た そ の 通 り で す。」 コリントの信徒への手紙一 15:47,48

パウロは、復活に関するこの教えを次のように締めくくりました。「この朽ちるべきものは、朽ちないものをまとい、この死ぬべきものは、不死をまとうのです。こうして、この朽ちるべきものが朽ちないものをまとい、この死ぬべきものが不死をまとうとき、『死は勝利に飲み込まれる』と書

かれている言葉が成就するのです。『死よ、お前の 刺はどこにあるのか？ 墓よ、あなたの勝利はどこにあるのか？』と。コリントの信徒への手紙一 **15:53-55**

このように、パウロはわずか数語で、教会の希望と世の希望の両方を提示している。教会の復活の希望とは、「栄光と誉れと不死」である。（ローマ人への手紙 **2:7**）生まれながらにして不死を備えている人間は一人もいない。それは、死に至るまでキリストの足跡を忠実にたどる者たちに与えられる報いである。ヨハネの黙示録 **2:10**には、「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える」と記されている。

最初の復活においてこの栄光に満ちた希望が実現するための、彼らへの召しと備えは、ペンテコステ以来のこの時代において、聖霊を通じた神の御業であった。しかしパウロは、これが成し遂げられ、キリストの教会、すなわち「からだ」の最後の者が栄光に入ったとき、死の滅びに関する旧約聖書のそれらの栄光に満ちた約束が成就する時が来ると説明している。「死よ、お前の刺はどこにあるのか？ 墓よ、お前の勝利はどこにあるのか？」 **1コリント15:55**；イザヤ書**25:8**；ホセア**13:14**

パウロは、イザヤ書とホセア書を引用して、人間の大きな敵である「死」と「墓」を滅ぼすという神の御計画を私たちに確約しています。ホセア書 **13章14節**で使われている「墓」という言葉は、ヘブライ語の「シェオル」の翻訳であり、新約聖書のギリシャ語「ハデス」に相当します。これらの

言葉は、箇所によって「墓」とも「地獄」とも訳されていますが、それらが示す意味、特に「墓」という言葉は、単に死の状態、すなわち忘却の状態を指すものであり、文字通りの苦しみを受ける場所を指すものではありません。（伝道の書9:10；詩編115:17；使徒言行録 2:31）したがって、イエスが「地獄の門」——すなわち墓、死——が教会に打ち勝つことはないと言われたとき、イエスが指し示された人類に対する神の御心を、私たちはこのように理解するのです。マタイによる福音書16:18

なんと素晴らしい確信でしょう！罪と死が支配する間、地獄——すなわち墓——は犠牲者を奪い続けてきましたが、ヨハネの黙示録1:18において、イエスのご自身が地獄の「鍵」をお持ちであると告げておられます。イエスは、人類の贖い主としてご自身の死によって、この鍵、すなわち地獄の門を開く権利を買い取られたのです。イエスの教会が完全に築き上げられたとき、教会はイエスと共に、全人類に約束されたいのちの祝福を受けることになるでしょう。

その間、何百万人もの人々が死、すなわち聖書に記された地獄へと向かい続けているという事実があっても、彼らからこれらの祝福が奪われることはありません。地獄の門はキリストに打ち勝つことはできませんでした。それは、キリストの教会に対しても、残りの世界に対しても、そしてアダムとアダム以来死んだすべての人々に対しても、打ち勝つことはできないでしょう。神の力によって、これらの門は大きく開かれ、死の囚人たちは

すべて解放されるのです！ イザヤ書 42:7；イザヤ書 49:9；イザヤ書 61:1；ルカによる福音書 4:18

これこそが、教会の将来の働きとなるのです。なんと栄光に満ちた働きでしょう！今、主に忠実であることを証明する上で、これほど大きな励みとなるものはないはずです。天の父と一つとなり、主に完全に献身して生きることによって由来する平安と喜び以上に、人が経験しうるものはありません。確かに試練はありますが、パウロが私たちに思い出させてくれるように、主が約束してくださった「永遠の栄光の重み」に比べれば、それらは実際には「軽い苦難」であり、「ほんの一瞬」しか続かないものです。コリントの信徒への手紙二

4:17,18

今この時代に、「召し出された者たち」、すなわち教会の一員と数えられることは、祝福に満ちた特権です。神は確かに御自分の民を祝福しておられます。とりわけ、救いの計画の美しさを彼らに明らかにしてくださっているのです。キリストとその教会を通して、全世界が、主が彼らのために用意された祝福——ペテロが「世の初めから、神がすべての聖なる預言者たちの口を通して語ってこられた」と述べた「回復の祝福」——に喜びを見出す機会を得られることを、私たちはどれほど感謝していることでしょう。使徒言行録3:21

教会と世界の双方に対する、調和に満ちた愛に満ちた神の救いの計画を鑑みれば——その美しさの一部はすでに御言葉を通して私たちに明らかにされている——私たちは、偉大なる使徒パウロが次のように記した時の心情をよく理解し、その言葉

に共感することができる。「ああ、神の富と知恵と知識は、なんと偉大なことか！ 神の御決定や御業を理解することなど、私たちには到底できません。だれが主の御心を知ることができるでしょうか。だれが主を助言できるほど十分に知っているのでしょうか。また、だれが主に何かを与えたのでしょうか。すべては主から出て、主の力によって存在し、主の栄光のためにあるのです。主を永遠に賛美します。アーメン。」ローマ人への手紙 11:33-36